

〔編集後記〕

本ジャーナルも18号以来、年2回発行が実現され、毎号多数の寄稿申込者を得、編集委員がその取捨選択に智慧をしばるという状況がつづいていることはまことによろこばしいことである。しかし同時に、その選択の基準をより公正で合理的なものにするため、なるべく早い機会に所員会議の議題として、従来の慣行等を再検討する必要があるのではないかと思われる。

さて昨年までとちがい、寄稿募集、執筆申込期限および原稿メ切を、従来の期日よりそれぞれ約1ヶ月くりあげることを試みた結果、夏休に入る前にほぼすべての原稿が出揃うこととなり、予定通りの発行の運びとなった。来年以降もこのやり方がつづけられることが望まれる。

最後に、S. Olu Agbi 氏の論稿は、去る1982年1月18日、社会科学研究所と大学院行政学研究科共催の公開セミナーでの講演内容をもとにまとめられたものであることを付記し、執筆、編集その他この号完成のためにお力添えを頂いたすべての方々に、心より厚く御礼申し上げる次第である。

(橋本哲一 記)